勇気を出して

中　一

ある日、ぼくが友達の家に遊びに行ったとき、帰り道に近所に住んでいる一人暮らしのおばあちゃんを見かけました。そのおばあちゃんは、犬を三匹飼っていました。この日は買い物に行っていたようで、三匹の犬を片手に、もう一方の手には重たそうな物がたくさん入ったビニール袋を二つ持って、山道を登っていました。ぼくは、「助けたいな。でも、恥ずかしいし、緊張するな。しかも、自転車だし。こっちも荷物を持っていて、人のなんか持てっこないしな。いいや、早く帰ってしまおう。」と思って、早く家に帰ってしまいました。しかし、家に帰っても心がもやもやして、夜もなかなか眠れませんでした。

そのようなことがあって何日かたったある日、またもや、ぼくが友達の家に遊びに行ったとき、帰り道にこの前と同じおばあちゃんを見かけました。また、買い物の帰りのようで、三匹の犬を片手に、もう一方の手は、この前と同様で、重たそうな物がたくさん入ったビニール袋を二つ持って、山道を登っていました。そのとき、ぼくは止まって、「どうしようかな。助けてあげようかな。それとも、この前みたいに早く帰ってしまおうかな。でも、もう夜に眠れないのは嫌だしな。」と思いながら信号が青になっているのにも関わらず、そのおばあちゃんをじーっと見て、止まっていました。

信号がちかちか点滅し始めていることに、「はっ」と気付き、すぐに横断歩道を渡りました。そして、勇気を出しておばあちゃんの方へ自転車を走らせました。どきどきしながらおばあちゃんの近くまで行ったこの時間がとても長く感じました。それから、一回大きく深呼吸をしたあと、ぼくはおばあちゃんに、

「おばあちゃん、その重たそうな荷物、ぼくが持ちます。家が近いので。」

と言いました。そうしたら、おばあちゃんが、

「ありがとう。気持ちだけでいいわよ。もう暗いし、寒いから早く帰りな。」

と言って、違う道に行ってしまいました。ぼくは、一、二分その場でぼうぜんと立ちつくしていました。そのとき、ふと思いました。「なぜ遠い道の方

に行ってしまったのだろう。わざわざ時間をかけて、遠回りする必要があったのかな。」ということを思っていました。でも、「そんなことはどうでもいい。」と思い、頭を二回横にふって、家へと全力で帰りました。

その翌週、ぼくは、先週のことなんてすっかり忘れて、学校へ遊びに行きました。その帰り道に、今度はお店からおばあちゃんが出てくる姿を見つけました。お店のペットエリアから犬を三匹連れ出して、家に帰ろうとしていました。ぼくは無意識におばあちゃんの方に向かい、笑顔で、

「ぼくが持ちます。その荷物。」

と言って、手をにぎりました。その思いが伝わったのか、おばあちゃんも、笑顔で、

「ありがとさん。」

と言い、荷物をぼくに渡してくれました。ぼくは、おばあちゃんの歩くペースに合わせて、自転車を押しながらおばあちゃんの家へと向かいました。そして、そろそろおばあちゃんの家というところで、おばあちゃんが、

「今日はありがとね。あまり知らない人と話そうとする勇気と、自分の荷物もあるのに人の荷物まで持ってあげようとするその優しい心を、ずっとずっと自分の心の中に生かしておいてね。」

と言い、家の中へと入って行きました。そして、ぼくは、

「勇気と優しい心をずっとずっと自分の心の中に生かしておくか。」

とつぶやくと、自転車に乗りました。そして自分の家へとゆっくりとゆっくりと自転車をこぎ始めました。そのときには、もう美しく輝いた満月の光が、うす暗い真冬の夜空を照らしていました。